

寺田先生と銀座

中谷宇吉郎

青空文庫

寺田寅彦先生の連句の中に
てらだ とらひこ

春の夜や不二家を出でて千足屋
ふじや いせんびきや

という句がある。

「銀座アルプス」や「珈琲哲学序説」などでよく分るように、先生は銀座へよく出かけられた。

先生は、毎日のように、十一時半頃になると、実験室へ顔を出され、「ちよつと失敬」といって、銀座へ出かけられた。そして風月か不二家で、ゆっくり昼飯を食べて、珈琲をのんで、銀座をぶらぶらして、三時頃にまた理研へ帰って来られた。後には、銀ぶらのかわりに、映画を覗く^{のぞ}か、玉を突かれた。いろいろな映画論は、それから生れたのである。先生と銀座については、妙にはつきりした印象が、一つ残っている。それは先生と、千足屋でメロンを食べた場面である。考えてみると、もう三十年以上の昔の話であるが、メロンという西洋の非常に高貴な果物が、その頃初めて、千足屋で売り出された。何処^{どこ}の帰りだったか忘れたが、或る^あ夕方、二、三人の教室の連中と、先生につれられて千足屋へはいった。

「何にしようか」と見廻すと、いろいろなものの名前を書いた白い紙片が、たくさんぶら下っていた。その中に「メロン五十銭」と書いたのがあった。メロンの名前は、もちろん知っていたが、それは遠い世界の話で、自分でメロンを食うなどということは、思いもつかなかった。だいたい五十銭という値段は、大学前の洋食屋で、毎日食べるランチの、二日分である。それで先生が「どうです、諸君、メロンを食べてみませんか」といわれた時には、思わずドキツとした。

持ち出されたメロンなるものは、厚さ一糎センチくらいの薄緑の薄片である。今から考えてみれば、ごく普通のマスクメロンを十六人前くらいに切ったものであった。しかしこの初めて見るメロンは、外側が浅い鮮あざやかな緑色で、それが内側の橙色だいだいにとけ込んでいる様子が、如何いかにも美しく、また高貴に見えた。

初めてではあるが、大体見当はつくので、内側からスプーンで削けずって食べ始めた。まくわ瓜うりの味を少し淡くしたようなものであったが、これがメロンの味かと思って注意して食べた。三分の二くらい行つて、まだ軟やわらかい部分が大分残っていたが、こういう高貴なものは、そう下品に食べては悪いと思つて止よした。他の若い連中も皆そうした。

ところが先生は、ずっと皮に近いところまで、削りとつて食べられた。そしてひよつと

私たちの皿を見て「君たちは、メロンは嫌いですか」ときかれた。一同はあわてて「いいえ」といって、また残りのところを食べた。

(昭和三十年二月一日)

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「百日物語」文藝春秋新社

1956（昭和31）年

初出：「銀座百店」

1955（昭和30）年2月1日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寺田先生と銀座

中谷宇吉郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>